

サンプル

「あの、篠崎……」

「ん？」

「あの……えっち、したいです」

性的嫌悪からずつと自慰すらせずにこの年まできて、篠崎の優しさと愛情でそれを乗り越え身体を繋げてから一ヶ月。好きな人と触れ合うことの喜びを知った。それは言葉にならないほどの幸せな時間だった。篠崎は本番の前に何日もかけて性的な接触に慣れさせてくれた。

そして初めてのセックスのときも時間をたっぷりとかけてくれた。セックスの最中はずつと安西の様子を逐一確認して丁寧を抱いてくれたのだ。

「ああっ……や……やだ……」

「怖い？」

「……気持ちいい……声出ちゃうから、や……」

セックスをしようと決めたときにした篠崎との約束事は「思っていることをきちんと声に出す」ということだった。気持ちいいも怖いも痛いも恥ずかしいも全て。

「可愛い声だよ。俺はもつと聞きたい」

「恥ずかしい……」

「可愛い」

「や、あつ……」

「もつと聞かせてくれ」

「あああつ！！」

剛直で中を擦られながらおちんちんを抜かれ、安西は呆気なく達した。刺激を受けることに慣れていない敏感なそこは普通の人が感じる以上に強い快楽を拾った。

「あ……」

「ちゃんとイけたな」

セックスで射精できるかどうか、とはセックスをする前に安西が篠崎に言った不安の一つだった。過去同級生に局部を触られた嫌悪感で、自分以外の人が触れることに抵抗があったのだ。

「ん……」

「気持ち良くなれたかな」

「……はい……」

「可愛い顔だ」

「や……」

安西が想像していた以上の強いエクスタシーだった。今まで自慰をしたことがないわけではな

いい。でもそのときとは比較にならないほどの快感だった。

「大丈夫か」

「すごい……すごかったです」

「見てごらん」

「ん……」

篠崎は続ける気がないのか、挿入していたペニスを抜いた。そして二人で身を起こす。

「黄色くて粘着性が強いだろう」

篠崎の手にあるのは先ほど受け止めてくれた安西の精液だった。

「や、恥ずかしい」

自分の絶頂の証拠をまじまじと見られ、恥ずかしさに顔を逸らす。

「ずっと射精していなかっただろう。だから余計に快感が強かったんだ」

「……そうなんですか」

「そうだよ。射精を何日も我慢していると精液が固まって、強い快感になるんだ」

そのとき安西が思ったのは、それならもっと我慢したらもっと気持ち良くなれるのか、ということだった。

その日、篠崎はもう挿入をしなかった。篠崎にも射精をして欲しかったけれど、久しぶりの射精で疲れただろうと疲れ果てた安西の身体を清め抱きしめて眠ってくれたのだ。

それからこの一か月で数回身体を重ねた。そのときは篠崎もしっかりと射精をしてくれた。それがとても嬉しかったけれど、篠崎の言う通り最初のときほどの快感は得られなかった。肌の触れ合いだけで十分幸せな気持ちになったけれど、一度知ってしまった強い絶頂はなかなか忘れなかった。

「うん、えっちしようか」

「いいんですか」

「ダメな理由がないな。諒くんから誘ってもらえて嬉しい」

誘う。大人同士では身体の間係を求めるときにそういう言い方をすることは知っている。けれどそれを知ったドラマではもっと婉曲的な言い方——いや、言葉にしてすらなかったような気がする——をしていた。やはり自分のような誘い方は稚拙なのだろう。

「どうした」

「あの……ごめんなさい」

「何を謝るんだ」

「えと、上手に誘えなくて。その、大人みたいに」

「俺は甘えたがりで子供みたいな諒くんが好きだと言ったろう。変に場数だけ踏んでるような大人じゃなく、そのままの諒くんが好きだよ」

「……じゃあ、えっちしたいときはえっちしたいって言っていいんですか」

「もちろん。むしろ間接的な誘いをされたらどこで覚えてきたのかと不安になる」
「や、そんなの……」

どこかで覚えてくるなんてありえないのに。せいぜいテレビや小説でだけしか。

「うん、だから俺が教えたことだけしてくれたらいい」

「わかりました」

そうは言っても篠崎だっていつまでも子供の相手なんて物足りないはずだ。セックスだって、安西は横になってくれるだけ。ようやくキスで舌を差し出すことができるようになったレベルだ。篠崎の背中と腕に縋りついて、あんあんとかくことしかできていない。

「えっちなような」

「はい……ン……」

安西はまだ、篠崎の唇を自分から塞いだことすらない。

自分はこんなにもいやらしかったのだろうか、と愕然とするときがある。それは朝起きたときだったり、仕事の昼休みだったり。意識していなかったのに急に頭にセックスが浮かぶのだ。それも徐々に内容が変化してきた。最初こそ篠崎にしてもらったことが頭で反芻されただけだったのに、最近は篠崎にされていないことまで浮かんでくる。例えば恥ずかしいことを言わされる、とか。

「篠崎」

安西は自分がえっちなになってしまったことに困惑した。こんなことは初めてで、どうしたらいいのか分からなかった。けれど相談できるような相手もないし、ネットで検索するにもどんなワードで検索したらいいのかが分からなかった。

「どうした」

篠崎はソファで夕食後のお酒を嗜んでいる。

「あの、僕、えっちななっちゃったんです」

「？だめなのか」

どういうことだ、と言われるのだろうと思いついたので、篠崎の返答に安西は困惑した。

「えと……」

「気持ちいいことを知ったからえっちなが好きになったんだろう……本来なら中学生くらいで経験することだ。諒くんはそれが今になっただけで、何もおかしいことはないよ」

篠崎は優しく言って頭を撫でてくれた。

「本当ですか？」

「諒くんに嘘を言ったことがあったかな」

「……ないです」

「今もえっちな気分かな」

「……はい」

素直に頷くと篠崎は少し考えてから口を開いた。

「どうしてえっちなっちゃったと思ったんだ」

言ってもいいのだろうか、引かれてしまわないだろうかと思うけれど、篠崎は今まで安西の言動に引いたことは一度もなかったし、いつも素直に言うと言われて褒めてくれるのだからきつと大丈夫だろう。

「朝とか、仕事とか、えっちな関係ないときでもえっちなことを考えてしまっただけ」

「そうか……朝はともかく仕事は辛いな。えっちなことを思い出しておちんちんが勃起してしまっただけはあるのかな」

「あります……」

それは安西が一番困っていることだった。篠崎には省力して仕事と言ってしまったけれど、正確には昼休みだ。やばい、と思った時点で屋上やトイレに逃げ込むので誰かに勃起を見られたりはしていないのだが、もし今後もつとえっちなことになって休憩時間以外にもえっちを思い出してしまったらと思うと不安で仕方がない。

「それは困ったな……なら、えっちなことを思い出しても勃起しないくらい沢山射精しようか」

「けど、思い出しちゃうんです……」

「たまたまの中が空っぽだったらえっちなことを考えてもおちんちんは勃起できないから大丈夫だよ」

「そうなんですか」

「うん。まずは朝起きたときに一度射精するようにしようか。そうしたら少なくとも仕事は大丈夫だと思うよ」

「わかりました」

「ああ、自分でしてはいけないよ。俺がする」

「してくれるんですか」

「ああ。だから諒くんは決して自分で射精しようとしてはいけないよ」

「わかりました」

自分でするよりも篠崎にしてもらう方が気持ちがいいし、何より朝から篠崎に触れてもらえるなんて嬉しい。それに仕事中に勃起しなくなるならもう不安も不満もない。

「嬉しいです。お願いします」

それから毎朝、寝起きすぐベッドでおちんちんを弄ってもらって射精をした。篠崎も一緒に扱って射精することもあったけれど、そこまで性欲が強くないのか、ほとんどは安西だけが一人、朝の明るい光の中ではしたなく射精をした。そのとき初めて使われたオナホールはとても言葉にできないほどの快楽だった。

「それなんですか」

「オナホールだよ。知らないか」

「知りません……すごい色ですね」

それはピンク色をしていた。女性器が横されているが、女性に性欲の湧かない安西にとっては未知なるものだった。

「これにおちんちんを入れて扱くんだよ」

「や、やだ、」

女性器におちんちんを入れる。そう考えるだけでおちんちんは力をなくしてしまう。

「目を瞑っているといい」

「やだ、それやです……」

「大丈夫、気持ちいいよ」

「や……」

篠崎が大丈夫と言うのなら大丈夫なのだろうし、気持ちいいと言うのなら気持ちいいのだろう。

けれどとても人ではありえないピンク色と、精密な女性器を見てもどうしても駄目だった。

「諒、目を閉じて」

「や、しのざき、やだ」

「大丈夫……ほら、いいこだから」

これほど嫌と言っても使おうとするのだから、言うことを聞くしかなかった。身体を寝かせ、目を閉じてシーツをぎゅっと握る。

「いいこ……あとでご褒美をあげよう」

「ご褒美……?」

オナホールへの嫌悪感からご褒美へと意識が移っていく。

「うん、何がいいかな」

「……抱っこ」

「甘えたい?」

「ん……」

「じゃあ抱っこでよしよししようか」

「あっ……」

抱っこで頭を撫でてもらえると思うと気持ちが上がってしまう。

「うん、抱っこでよしよしして……」

篠崎が手でおちんちんを扱く。簡単に硬くなってしまった。気持ちいい、やっぱり篠崎にしてもらうのが一番いいのだ、と思ったときだった。

「ああああ!!!」

突然柔らかくて温かいものに包まれた。手だと握っている部分しか包まれないけれど、これはおちんちん全体をきゅうきゅうと心地よく包んでいる。

「なにつ、や、だめっ」

「気持ちいいだろう」

「す……いつ……あ、だめ、動かしちゃ……出ちゃっ」

「うん、出していいよ」

篠崎はゆっくりとオナホールを動かしている。普段の手の動きの半分以下のスピード。それでも柔らかな感触がとても気持ちいいし、何より手では決して経験できない、おちんちん全体を包まれる感覚がとても気持ち良かった。

「でるっ……あっ……」

呆気ないほどすぐに射精してしまった。まさかこんなに気持ちがいいなんて。

「ちゃんと出せた。いいこ。怖かったか？」

「気持ち良かったです……」

まだ心臓がバクバクと鳴っている。

「良かった。じゃあほら、抜くよ。ちゃんと精液が出てるか確認しよう」

そう言っつて篠崎が抜いたオナホールを裏返した。

「えっ」

「ん？」

「え、それ……」

「これは裏返せるんだよ。中も綺麗に洗えるし乾かせる。オナホールはきちんとケアをしないとカビが生えるからな」

「……詳しいんですね」

「やきもちか？」

「……別に」

だって篠崎は……聞いたことはないけれど、きっと過去には男女問わず抱いてきているだろう。だからオナホールだって使ったことがあるし、本物の女性器に直接射精したことだってあるだろう。射精をした直後で頭が冷えたからか、そんなことを考えてしまう。さっきまで恐ろしい程の快感を知ってドキドキしていたはずなのに。

「諒」

篠崎が手を伸ばしてくる。

「や………」

触られたくない、と初めて思った。だってその手で何人の身体に触れて、何人を絶頂させたのか。まさか篠崎程の男が童貞であるはずはないし、童貞だったら初めての安西に対してあんなに丁寧なセックスはできないだろう。分かっている。過去は過去だ。けれど篠崎しか知らず、女性器に挿入したいと思ったことすらない安西にとっては……。

「諒」

篠崎が困っている。せっかく気持ちいいことを教えてくれたのに、困らせてしまっている。

「ごめんなさい、シャワー浴びてきます」

このままだと篠崎の前で泣いてしまう。それだけは決してしたくない。だってそんなの身勝手すぎる。

「諒、待って」

「………や」

「すまない、無理矢理だったな」

「ちがつ……」

違う、そうじゃない。オナホールを使われたことに傷ついているんじゃない。篠崎の経験値を勝手に想像して勝手に傷ついているだけだ。

「諒。だめだよ、行かせない」

ベッドから下りようとしても篠崎に腕を掴まれ放してもらえない。

「……や……」

必死に我慢していた涙が飽和して溢れてしまう。見られてしまう。泣き顔なんて見られ慣れてるけれど、こんな勝手な涙は見られたくないのに。

「諒、おいで」

「やだあ……」

力強い腕に引かれ、どさりと身体が倒れ込んだ。篠崎を潰してしまう。焦って身体を起こそうとしたけれど、背中に腕が回されていた。

「掴まえた」

「……しのざき」

「どうして泣いてる？オナホールがそんなに嫌だった？」

「……篠崎が、色々経験してるんだなって」

過去の男女のことなんて言えなかった。そんなことを言ったって過去は消えないし、過去の恋愛をしたのが悪いわけでもない。篠崎は普通に生きてきたただけ。安西が特殊だっただけ。

「嬉しいな」

「え？」

「妬いてくれたんだろう」

「……そんなんじや……」

「俺は嬉しかったんだが」

「なんで嬉しいなんて言うんですか」

「嬉しいに決まってる。過去は変えられないが、未来は全部諒くんのものだよ」

「わからないじゃないですか」

だって、篠崎がいつ安西に見切りをつけるか分からない。こんな面倒な奴は嫌だと思われるのは時間の問題かもしれない。そのうち自分も過去の一人になる。

「諒くんは俺と別れる予定があるのか」

「それはないですけど……」

「ならずつと一緒だろう」

「……はい」

とてもじゃないが納得はできなかった。けれどはいと答える以外になかった。

「納得していないな」

心の内がバレるとは思っていたが、これほどストレートに言われるとは思わなかった。

「まあ、こればかりはゆっくり時間をかけて自信を持ってもらうしかないな」

「こういうところが好きだな、と思う。無理矢理言い聞かせて感情を押し付けるのではなく、引くべき時は引いて、安西の今の気持ちを大事にしてくれる。そして言ったことは必ずする人だから、きつと本当に自信を持たせられるのだろう。」

「さあ可愛い顔を見せてくれ」

「可愛くないです」

「可愛いよ。可愛い」

「……そんなこと言うの篠崎だけです」

「よかった。他の人が諒くに可愛いなんて言っているのは許せない」

俺だけに可愛い顔を見せてくれ、と篠崎は恥ずかしげもなく言っただけ。こういうときに海外育ちだよな、と実感する。安西だったとしてもじゃないと言えない。

「気持ちは落ち着いたかな」

「はい、すみません……」

「いいんだ。じゃあご褒美の抱っこよしよしをしよう」

そんなこと、安西だって忘れていた。オナホールで射精できたらご褒美をくれるという話。ぐずって泣いてしまって、ご褒美なんてとても貰えるような状況じゃないのに、篠崎はちゃんと約束を守ってくれる。

「ほらいいこ」

寝ころんだ状態から身体を起こし、そのまま抱き込まれて頭を撫でられる。嬉しい。嬉しい――。

「しのぎゅ」

「うん」

「すき」

「可愛い。俺も愛してるよ」

~~~~~

「……篠崎は、SMが好きですか」

もし好きでないのなら安西としてしたくない。篠崎が好きでないことを無理矢理させたくはなかった。しかし篠崎の答えは違った。

「好きだよ。痛いこと、苦しいことに悲鳴を上げながら、泣きながら耐えている姿が好きだ」

「……じゃあ、感じちゃいけないですか」

「まさか！痛いのに感じている姿がいいな」

その様子に嘘を吐いている感じはなかった。むしろ嬉しそうだ。もしかしたら今まで普通のセックスで退屈をさせてしまっていたのかもしれない。篠崎が好きなことなら何でも受け入れたい。



「篠崎は何をしたんですか」

「ここを……痛めつけない」

虐めたいではなく痛めつけない。そう言って撫でられたのはカウパールの光るおちんちんとタマだった。

「あん……どんな風に……？」

ドキドキする。篠崎に痛めつけられるなんて。さっきの動画みたいにされてしまうかもしれないなんて。

「……言いきれないな」

そんなに沢山あるのか。

「例えば……？」

「……諒くんにはまだ少し怖いかもしれない」

「聞くだけで？」

「うん」

篠崎が言い淀むなんて珍しい。それほど怖いことなのだろうか。自分の被虐性を知ったばかりだというのに、安西はもう全てを受け入れたいと思ってしまうている。

「……辛くて、辛すぎておちんちんを切り落としてくれと泣きつくほど辛いことをするよ」

「あ……」

したい、ではなく「するよ」と篠崎は言った。もしかしたら安西が想像している以上にSMの世界は広く、篠崎の嗜虐性は強いのかもしれない。

「……カウパーが垂れた」

「えっ……？」

大事なそこを切り落として楽にして欲しいと乞う程に辛いことをされるかもしれないというのに、おちんちんは更に硬くなってカウパーまで垂らしてしまっていた。それはもう隠しようのない安西の本音だった。

「やっとおちんちん使ってもらえるようになったのに、切り落としたらおちんちんが可哀想なんじゃないか」

篠崎が人差し指の先でおちんちんを下からそっとたどる様に撫で上げる。

そう言うということは、切り落とすたくなるほど、というのは比喻なのだろうか。本音が読めない。

「……まだ想像もつかないかな」

「ごめんなさい……」

「謝ることはない。そうだな、ではまずはしばらく貞操帯をつけてみようか」

貞操帯。どんなものなのだろう。でも篠崎がそう言うのだから、そうしてもらった方がいい。

「……はい……」

「お願いします、と言ってみようか」

「お願い……します……」

いいこだと褒めてくれる様子は普段の篠崎だった。しかし、会話の内容は普段とは似ても似つかない。

くくく

「たまたまを引つ張るよ。ほら、動画で見ただろう。ベルトで締められて四つん這いで歩くやつ」

「はい……」

あれはとても痛そうだった。痛そうに見えた。けれど本当に痛いのかは分からない。

「ゆっくり息を吸って、ゆっくり吐くんだよ」

「はい……」

ドキドキする。緊張する。怖くはない。まるで予防接種の順番を待つときのようだ。大丈夫と分かりながらもなんとなく緊張するような。

「うん、上手……いくよ」

「はい……あ~~~~~~~~っ!!」

タマが引きちぎられるかと思うほどの鋭い痛みだった。タマから伝って下腹部まで痛む。

「あ……………い、いだ…………」

「頑張ったな。ちゃんとおちんちん萎えさせられたよ」

篠崎がゆっくりとタマを撫でている。優しい手付き。今のきつい痛みを与えた手とは思えない。

「ううう…………」

「諒。ご挨拶できるかな」

挨拶……？痛みが続いていて頭が回らない。

「諒、どうしておちんちんを萎えさせたのかな」

「て、貞操帯を…………」

「うん、そのために自分でできたかな」

「篠崎にしてもらいました……」

「じゃあ、言えるかな、大切なご挨拶だよ」

「ありがとうございます……ごさいました…………」

「いいこ。きちんとご挨拶できたな。これからは言われなくても自分からするんだよ」

「はい……」

こんなに痛い思いをさせられて御礼を言うなんて。けれど、それが礼儀なのだろう。だって安西がしてほしいと言ったSMプレイ。貞操帯の為に萎えさせてもらったのだ。

くくく

貞操帯三日目——

「貞操帯には慣れたかな」

「はい……」

初日はあんなに満たされた気持ちだったのに、たった三日で射精欲と勃起欲に翻弄されていた。射精したい。ダメならせめて勃起だけでも。勃起したいはNGワードではないから言ってもいいのだろうけれどなんとなく憚られて言えないままの三日。頭の中はずっと貞操帯でいっぱい、どうにか外してもらえないかとそればかり考えていた。そうなのだ、外してもらえないのだ。この二日、つまり金属タイプに変わってから一度も外してもらえていない。排泄もシャワーも装着したままなのだ。だから一瞬たりとも勃起するチャンスがない。

「今日はメンテナスをするよ」

メンテナスとは何をするのだろうか。まさか油を差す必要はないだろうし。

「お風呂に行こう」

「はい」

連れられてお風呂に向かう。篠崎は服を着たままだけれど、全裸になるように言われて自ら脱ぐ。

「おちんちんとたまたまは痒くないかな」

「少し……」

「わかった。綺麗にしような」

浴室の床に座り、足を広げる。恥ずかしい。見られている、それだけで勃起しようと膨らんでいる歪なおちんちん。

「勃起したくて必死だな」

「はい……勃起したいです……」

「でも我慢も気持ちいいだろう」

本音を伝えていいのだろうか、と一瞬悩む。けれど篠崎は素直な安西が好きだと普段から言っているから。

「辛いです……」

「そうか、辛いかな。ああ、すまない諒くん、後ろを向いてくれ」

「はい？」

首を掲げる。

「後ろを向いて。これからは二度は言わないよ」

「ごめんなさい」

膝立ちになり、背を向けた。

「じゃあ両手を後ろに回して」

「はい」

何をされるのだろうか。分からないけれど、篠崎なら怖いことはしないから大丈夫。昨日の夜、篠崎は寝る前に抱きしめながら教えてくれたのだ。SMが一番大事なのは信頼関係であると。篠崎は決して安西に無理なことはさせないからと。普段の様子を見ている、確かに無体を強いられるような気はしなかった。だから大丈夫。任せてしまっても大丈夫なのだ。そうすればもっとい

やらしい身体に変えてもらえるから。

「今から貞操帯を外すから、諒くんが自分で触ってしまわないように手を拘束するよ。貞操帯を装着したらすぐに外すから大丈夫。怖いかな」

「……大丈夫です」

まさかそこまでされるとは思っていなかった。でも受け入れる以外の選択肢はない。

手首に冷たいものが触れる。手錠だ。少し重い。まさか本物ではないだろうけれど、ずしりと心に押し掛かる。

「いいこ。じゃあこちらを向いて、さっきみたいに足を開いて恥ずかしいところを見せてもらん」  
言われた通りにすると頭を撫でてもらった。篠崎はこうして甘やかすのが美味いから安西はほいほいと言うことを聞いてしまうのだ。

「お水をかけるよ。耐えれなかったら言いなさい」

「はい……ひゃっ」

「大丈夫か」

「はい、気持ちいいです……」

おちんちんが萎んでいく。ああ、やはり今日も勃起はさせてもらえそうにない。

冷水で萎えたおちんちんから貞操帯が外される。久しぶりの解放感。けれど篠崎はまた冷水をかけた。今度は同時に自らの手まで冷やしている。徹底的に勃起をさせないつもりなのだろう。手を拘束されていてよかった。きつと手が自由だったら篠崎に懇願してしまっていた。どうか勃起だけでも、勃起だけでもさせてくださいと。

「うん、いいかな。風邪を引かないように早めに終わらせよう」

泡のソープがおちんちんとタマを包む。しかししっかりと冷やされたせいかあまり触れられていない。感覚が戻ればと思っている間に洗浄は終わってしまった。ああ、勃起できるかもしれないチャンスが――。

~~~~~

貞操帯五日目――。

「諒くん」

「はい……」

今日は休日だ。明日も休み。何を言われるのだろうとドキドキする午前十時。

「せっかくおちんちんで気持ち良くなることを覚えてんだから、腰を振ることも覚えようか」

一体何を言っているのだろう。確かに性的嫌悪で使命の一つを蔑ろにされていたおちんちんがようやくそれを思い出したところだけど、腰を振る必要はないはずだ。

「必要ないです」

「……女に入れたくない？」

「っ！！ないです！！」

「だが俺は諒くんが童貞らしく下手に腰を振りながら感じている姿が見たいな」
篠崎の希望なら、と思ってしまう自分が悲しい。

「……けど、女の人なんて……」

「大丈夫、玩具だよ」

「玩具、ですか」

よかった、浮気を勧められているんじゃないかった。

「これだ」

篠崎が寝室から持ってきたのは大きな肌色の物体。おそらくシリコン。

「据え置き型のオナホール。分かるかな」

「置いて使うってことですか」

「そう。気持ちいいのは普通のオナホールと同じだよ。ただこれは自分で持って扱くことはできないので、自分で入れて腰を振らないといけない」

「けど……」

「諒」

「あ……」

けど、と言ってしまった。言ってはいけないと言われていたのに。

「ごめんなさい……どこでしたらいいですか」

「床だと足が痛くなってしまいうからベッドの上でしょうか」

二人で寝室に入る。つい数時間まで守るように抱かれて眠っていた場所。

「まずは穴を確認してごらん」

「……女の人の性器ですよね……」

「ああ……見るのも嫌かな」

「……見ます……」

「うん、大丈夫そうなら見た方がいい。諒くんはまだ見ないと穴の位置が分からないだろう」

「っ……」

童貞を強調された発言。篠崎の経験を思わせる発言。

「ほら、ここだ。ここが膣。これはアナルも使える。どちらに入りたい？」

正直どちらでも良かった。ただの穴、玩具、そう思っていないととてもじゃないとできそうにない。

「どちらでも……」

「じゃあせっかく女とするんだから膣に入れなさい」

「あの、このまま……？」

今は金属リング型の貞操帯が装着されている。

「うん、そのまま。射精はできないから、腰の動きがスムーズになるまで腰を振りなさい」

「はい……」

おちんちんを穴に入れて腰を振る、なんてこの先一生しないはずなのに、なぜ練習なんてしないといけないのだろう。さつき篠崎が言ったように、下手に腰を振りながら中途半端な快感に泣く姿が見たいのだろうか。

「ローションを」

手渡されたローション。しかし使い方が分からない。手を出して穴に塗り込めばいいのだろうか。

「……蓋を開けて、穴に入れて押し出せばいいよ」

「……ありがとうございます」

教えてもらったことに礼を告げ、そのようにする。量がわからないけれど、適当に。

「さあ、おちんちんを持って、膣に入れるんだよ」

「……はい……」

篠崎の言い方が生々しい。まるで篠崎に教わりながら女とセックスをするみたいだ。いやなのに、なぜか興奮してしまう。セックスなんて篠崎以外とたくないのに。なのに、篠崎に教わりながら――

「いたっ……」

「嫌なのかと思っていたが、案外そうでもないんだな。ほら、女が待ってる。早く入れてあげな
かこ」

違うのに。女に入りたい期待感で勃起したがっているわけじゃないのに。

「はい……」

しかし反論はできない。おちんちんを持ち、膣の場所を確認しながら押し付ける。

「ああ……」

リングの隙間から感じる圧迫感。気持ちいい。きゅうきゅうと締め付けられる。

「気持ちいいか」

「はい……」

「きちんと言いなさい」

「……女の人の膣の中が、気持ちいいです」

「締めまりはどうかな」

「すごいです。締め付けられます」

「そうか。じゃあ腰を振りなさい」

篠崎はベッドから少し離れたところに置かれた椅子に足を組んで座っている。完全な指示者。支配者。

「はい……」

入れただけでこんなに気持ちがいいのに、擦ったらどうなってしまうのだろう。勃起できないのに、ひどい痛みと締め付けで壊れてしまうんじゃないだろうか。けれどやらなくては。下手に、けれど必死に腰を振るところを見てほしい。

「あっ、あっ！！」

「そんな動きでは女は満足できないよ」

「あっ……ごめっ」

「女に謝ってるのか？」

「ああっ!!やだあっ!!」

「ほら、抜けてしまう。きちんと押し込みなさい」

「あんっ!!あっ、あっ……」

気持ち良さを追いかけて夢中になると、ずるりと抜けてしまった。快感が欲しくて急いで挿入を再開する。

「こら、そんなに雑に扱ったら女が可哀想だろう。自分が気持ち良くなることじゃなく、女を満足させられるように腰を振りなさい」

「はいっ……ああっ!!」

くくく

貞操帯三十日目——

出したい。射精したい、勃起したい気持ち良くなりたいたいイきたい壊れる出したい勃起射精——。

「諒くん、腰の振り方は覚えてるかな？」

「え、」

「腰の振り方だよ。前に練習しただろう」

「あ……」

そう言えばそんなこともあった。貞操帯で戒められたまま、上手に腰が振れるまで据え置き型のオナホールで自らを虐め続けた。

「その様子だと腰の動きを忘れてしまっているかもしれないな。もう一度しよう」

あの苦しみをもう一度——いや、きつとあの時よりもっと辛い目に遭う。だって我慢の期間が違う。きつと膣の感触を味わう余裕もなく、射精したいという本能に苦しめられるだけだ。

「わかりました……」

もうセーフワードすら浮かばなかった。だって篠崎の言うことを聞くのは、勃起できない安西が得られる今の唯一の快感なのだ。

前と同じようにローションを膣に入れて搾り出す。用意は簡単だ。あとは心の準備だけ。快感をすでに知ってしまったているせいで緊張がひどい。

横を見る。篠崎が椅子に座っているのも前と同じだ。少し離れた場所から安西の全身を視野に入れて観察される。

「諒」

「……はい」

オナホールに近付き、場所を確認する。貞操帯を持ち、腰を押し付けるようにして挿入した。

「ああ……」

気持ちいい。包まれる安堵感。貞操帯がなければ。これさえなければ気持ち良く射精ができるのに。

「動きなさい」

「はい……ああ……んっ、は」

腰を引き、押し付ける。最初はゆっくり、小さなおちんちんが膣から抜けてしまわないように気を付けながら。

「ああ、女も気持ちよさそうだ」

「あっあ……」

女が、この粗末なおちんちんで感じているなんて。

「貞操帯の金属が女のいいところを擦っているのかもしれないな」

「ああっ……やあっ……」

勝手に腰の動きが早まる。もっと気持ち良くなりたい。射精したい、出したい。このまま無理矢理おちんちんが膨張して、貞操帯が壊れてしまえばいいのに。そうなるんじゃないかと思えるほどおちんちんは強引に勃起しようとしている。

「ああっ!!」

気持ちがいい。気持ちいい。イきたい。

「諒。目を閉じて女の中を想像しながら擦りなさい」

「女のっ、なかっ?」

「そう。まんこの中だよ。褌があるだろう。褌がおちんちんに擦れるな?奥はどうだろう。諒くんの小さなおちんちんでは子宮口まで届かないかな」

「ああああっ!!」

篠崎の言葉の責め。言う通り目を閉じて聞いていたので、ストレートに脳に響いてくる。女の中。男が金を払ってでも経験したいと思う女の膣。

「精子を求めてうねっていないか?」

「ああっ!!あんっ!!」

「腰を振るのが上手になったな。あんなに嫌がっていた女の中に勃起できないおちんちんを入れて必死に腰を振って……そろそろ射精したいんじゃないか」

「したいっ!射精したいですっ!!!!」

「NGワードだ。諒、やめなさい」

「え……?」

NGワード?言ってしまったのだろうか。快感でいっぱい覚えていない。

「諒、お仕置だよ。どの女がいいか選びなさい」

篠崎がベッドに近寄り安西の視線の先に携帯を置いた。女の写真が並んでいる。風俗だ。

「どの女がいい」

「やっ、やです、ごめんなさいっ」

「お仕置きなのに嫌なんじゃないのか」

「あ……ごめんなさい」

「何のお仕置きだ？」

「僕がNGワードを言ってしまったからです……」

しっかりと覚えていないけれど、射精したいと言ってしまったような記憶がおぼろげだがある。

「そうだな」

篠崎が貞操帯に手を伸ばした。抵抗する間もなくカチャンと外されてしまう。

「あ、やだ、ごめんなさい、」

「イきたいんだらう？外さないと射精できないだらう」

「や、イきたくないです、ごめんなさいっ」

必死に許しを請うのに、久しぶりに解放されたおちんちんは大きくなってしまった。

「身体の方が素直だな」

「ちがっ、やだっ！！！」

篠崎を押しつけ、浴室に走る。シャワーを全開にして温度を水に変えた。

「ッ！」

冷水が局部を冷やす。火照った身体に突然の冷水を浴び、おちんちんはすぐに小さくなった。

「諒！」

「貞操帯、つけてください！勃起できないようにしてください、お願いします！射精したくないんです！」

「諒、お仕置だらう。女を選びなさい」

絶対的な口調だった。目の前に携帯が差し出される。よく見ればそれは「中出しOK」というワードで搾られた検索結果だった。

「や、やです！！出したくないッ！！」

「諒、おちんちんが可哀想だらう」

「いいですっ！おちんちんいらんから、いらんからっ！」

「いらんのか」

「いらんのです……もうおちんちんいらん……！」

涙が零れた。なんでこういつも泣いてしまうのだろう。篠崎が悪いわけじゃないのに。NGワードを言ってしまったのは自分で、だから悪いのは自分なのに。

「本当にいらんのか」

「いらんのです……」

女に射精するくらいならいらん。篠崎以外の人とセックスをしなきゃいけないくらいならいらん。

「分かった。冷えるから温かいシャワーを浴びて待っていなさい」

「やっ、待っ、」

「大丈夫、すぐに戻ってくる。おちんちんは勃起していても構わないから、身体を温めなさい」

篠崎はお湯の設定を変えるとそのまま浴室を出て行った。

嫌われてしまっただろうか。呆れられた？NGワードを言ってしまったのは二回目だ。この一か月で二回も言ってしまった。SMを希望したのは安西からだというのにダメな奴隷だ。篠崎が幻滅してしまっても仕方がない。

それでも少しでもいいこになりたくて、言われた通りお湯にあたる。温かい。冷たかった下半身が温まっていく。

「諒、入るよ」

声が掛けられ、シャワーを止める。篠崎が本当にすぐ戻ってきてくれたことが嬉しかった。

「諒、これでオナニーをしなさい」

差し出されたのは大きな葉っぱだった。それも数枚。それを持つ篠崎は手袋をしている。

「ああ、待て、触る前に諒も手袋をするんだ」

「これ……」

何ですか、と聞きながら手袋をはめた。

「イラクサだよ。知ってるか」

「イラクサって……」

触れるとかぶれを引き起こす植物のはずだ。痛痒く、そして蕁麻疹を引き起こす植物。

「おちんちん、いらないんだろう。これを使ってオナニーをして、自分でおちんちんを壊しなさい」

「……女の人としなくていいですか」

「ああ」

「わかりました」

他の人とセックスするくらいなら。

「……これを観なさい」

篠崎は再び携帯を安西に向けた。先ほどの画面とは違う。男が一人イラクサを手立に立っている。動画が始まった。男がイラクサでタマを包んでいる。痛そうな悲鳴が聞こえる。なのにやめない。イラクサを使ったオナニーなのだろう。タマを包んだイラクサをぎゅっと握り、緩めてまたぎゅっと握っている。そして今度はそのイラクサをペニスに巻きつけた。痛そうだ。顔が歪んでいる。けれどその男はイラクサでペニスを包んだまま、イラクサごと抜き始めた。

『ああああああ……!!』

悲痛な叫び。けれどペニスは萎えていない。オナニーでしているくらいなのだから根っからのMなのだろう。

そして男は新たなイラクサを取り出すとそれで再びタマを包んだ。左手でタマを持ち、右手でイラクサごと抜く。もうすでにちらりと見える肌は真っ赤になっている。腹と足の付け根も赤くなっているのはイラクサが触れてしまったからだだろう。それなのに男はやめない。足が震えている。けれど抜き続けている。男がカメラに近寄る。荒れた肌が良く見えた。痛そうだ。でももしかしたら痒みもあるのかもしれない。そして真っ赤な亀頭がアップになり、白濁が弾け、画面は

消えた。

「さあ、やり方はわかったかな」

「はい……」

篠崎から渡されたイラクサの葉は二枚。やはり同じやり方をしろと言うことだろう。

一枚を浴槽の端に置き、まずはタマを包んだ。ちくちくする。痛い。イラクサの棘だ。

「いつ~~~~!!!!!!」

~~~~~

「もおやだああ……いきたくない……」

ぐずぐずと泣く。子供みたいだ。恥ずかしいのに止まらない。

だって、女の中に射精なんてしたくない。約三十年間、おちんちんを使うことなんて考えずに生きてきたのだ。トラウマを抱える前だって、オナニーのときは男に抱かれることを想像して抜いていたのだ。だから、一度だっておちんちんを何かの中に入れるなんて考えなかった。嫌悪感すらあった。なのに、篠崎がオナホールで包まれる快感を教えた。前だったら膣に入れるなんて考えただけで萎えていたはずなのに、今はそこが気持ちいいものだと知ってしまった。勃起していないなら無理矢理の挿入だって無理だけれど、勃起していたら手足を縛られてでもきつと篠崎は中に射精をさせるだろう。女が上になれば叶ってしまう。でもそんなのやっぱり嫌だ。篠崎に入れてもらう以外のセックスなんてしたくない。

「おちんちん……」

「うん？」

篠崎が優しく先を促すように涙を拭い、手を握ってくれる。

「おちんちん切って……」

安西の言葉に篠崎は驚いた様子もなく言った。

「……おちんちんの本来の役目は？」

「おしっこ……あと女の人の中で射精して子孫を残すこと……」

「うん。まだ諒くんは役目を果たしていないだろう」

「いやです、したくないんです。だからもう嫌なんです」

いやなの、いや、いやです、と繰り返した。篠崎は穏やかに「うん、うん」と涙を拭いながら聞いてくれた。

「諒くんがおちんちん嫌なのは分かったよ。けれどピアスだって痛い我慢して開けたばかりだろっ？」

「あ……」

篠崎が選び、手筈を整え開けてくれたピアス。今付けているのだって篠崎が選んでくれたピアスだ。

「諒くんにきつと似合うよ」

「そう言って選んできたピアス。」

「もう少し、我慢できるかな」

安西はこくん、と小さく頷いた。

貞操帯四か月と十五日目――

「いよいよだな」

「はい……ごめんなさい」

「どうして謝る？」

「ピアス、せっかく買ってくれたのに」

「いいんだよ。気にすることない。それにこれはたまたまにだって使えるから」

「たまたま……？」

「そう。たまたまにだってピアスは開けられるだろう」

あと一時間もすれば家を出る時間だ。

おちんちんを切ってほしいと頼んでから二か月半。その間も篠崎は大切そうにピアスを啜える亀頭を愛で続けた。写真も沢山撮られたし、舐められた。尿道がピアスを美味しいって言うてるからと、たまには他のものも食べさせてあげないと、とピアスを外されバイブ機能付きの尿道ブジーを入れられたこともある。そのときも貞操帯は外されていて、またセーフワードで射精を逃れたのだ。

限界まで高められ、自らセーフワードで寸止めを繰り返した回数ももう数えきれない。以前は勃起さえ許されなかったのに、おちんちんを切ってほしいと願ってからは性的な行為の度に貞操帯を外され、勃起を許された。でもそれが逆に辛かった。勃起して、もう射精の一步手前というところでセーフワードを言わなくてはならなかったからだ。でも一度も「もういいや」と思ったことはない。それくらい、篠崎以外との行為が嫌で嫌で仕方がなかった。

くくくく

「この病院は少し特殊なんだ」

「特殊？」

「きちんとした医師と看護師なんだが……そういう趣向の人の目的や希望を叶えてくれるというか」

篠崎にしては珍しく回りくどい言い方をする。

「どういう意味ですか」

「俺は諒くんが自らの意思でおちんちんをなくすところが見たいんだ」

「僕の意味でここに来ました。同意書だって」

「違う。ここに来ようが同意書にサインをしようが、やはり無理だと思えばやめられるし、無理

だと思っても手術台に乗ってしまえばもう後戻りができないと、諦めの気持ちで手術を受けてしまいかもしれないだろう」

「あ……それは、あるかもしれませんが……」

それでも決心して手術台に上がるのだ。同じではないのだろうか。

「おちんちんを切り落とすためのギロチンがある。自分で入れられるか」

「え……」

衝撃的な言葉だった。だってそんなの聞いたこともない。

「もちろん麻酔はされているよ。けれど局所麻酔だ。意識がある状態で、自らおちんちんを切り落とすためのギロチンの穴におちんちんを入れられるか」

頭が真っ白になった。だって、全身麻酔で眠っている間に終わっているものだと思っていた。

ここに来たことが意思表示で、あとは眠っているだけでいいと。

「無理かな」

「あ……」

何と言えばいいのだろうか。できる、なんて言えない。だって怖い。切り落とすところを見るなんてとてもじゃないができない。

「無理なら普通に全身麻酔で全てを終わらせることができるよ」

「あ……」

そっちがいい。そっちの方が絶対に楽だ。けれど篠崎の言葉を思い返すと、『そういうことができるから』この病院を選んだのだろうか。つまり篠崎はそれを望んでいる。安西が自らギロチンにおちんちんを差し入れることを。しっかりと最後まで自分の意思でおちんちんを切り落とすところを見守ることを。

「思っていることを話してごらん」

篠崎が優しく言う。背中を撫でる手も優しい。

「……怖いです」

「うん……」

「……怖い」

「……うん」

「けど……篠崎はそれを望んでいるんですよね」

「……ああ」

篠崎は余計なことを言わない。きちんと感情を全て吐き出させようとしてくれている。

「でも、その、切り落とされるとところを見るのは……身体から離れたおちんちんを見るのは怖いです」

「……それは大丈夫だよ。諒くんからは見えないものもある。見えるようにギロチン台が小さいものもあるが、見えないように壁のような板がついているものもある」

「そうなんですか」

「ああ。ちよっとすまない」

降りるように促され、膝から降りた。

「これを見てごらん」

篠崎に渡された薄い冊子。病室に置かれていたものだ。

「実はこれと同じものが家にもある。諒くんには見せなかったが」

知らなかった。けれど確かに安西を大切にしてくれる篠崎が何の情報もなく病院を選ぶとは思えなかった。

「これだ」

篠崎が開いたページ。「豊富な手術シーン」そう書かれたページ。見開きだが、続きもあるようだ。

「一、全身麻酔で……」

順番に見ていく。まずは全身麻酔で眠っている間に全てが終わっているもの。次は局所麻酔で意識はありながらも普通の手術台で行われるもの。そして局所麻酔で、同じく手術台だが患部の上に鏡がセットされ、手術の様子を自分で見ながら行われるもの。昔の中国の宦官のように斧のようなもので切り落とされるもの。これは専用の台の上に自ら陰茎を置けらう。最後にギロチン二種。篠崎の言ったように落ちた陰茎が見えるようにオープンになっているものと、見えない様にギロチン上部に板が張られているものだ。

「どうかな」

「えと……」

注意書きを読む。全て必ず麻酔を使うこと。それから根元から切るだけでなく、亀頭だけを切り落とす、希望の長さで切り落とすことも可能であること。宦官とギロチンは恐怖に動いてしまおうと希望の長さにならないことがあるので気を付けること。これは特殊な方法で本人希望でのみ行うもので、そのため身体の拘束はしないということ。

身体が拘束がないということは本能的に身を引いてしまったら違う部位で切られてしまうということだ。よほどの精神力がないと耐えられないだろう。

「宦官やギロチンでも、切り落とした後は全身麻酔に切り替えることができる。諒くんは尿道の位置も変えるから手術の時間も長くなるし、その方が楽だと思う」

「……本当に、自分で穴に入れるだけで……」

「大丈夫。ああ、だがここを見てごらん」

篠崎が指し示した文字。

『自ら、もしくはパートナーに刃を落としてももらうことも可能です』

「諒くんがおちんちんを自分でギロチン台にセットできたら……諒くんさえよければ俺がギロチンの刃を落としたい」

「あ……篠崎が……?」

「そう。俺が諒くんのおちんちんを切り落とすんだよ」

「あ……ほんと……?」

「うん」

